

## 〈論文〉

## 心象世界としてのエクスポト

## ——メキシコ女性の痛みの表現と死生観——

佐原みどり

## はじめに

メキシコ民衆の歴史的な痛みの体験を壁画にした画家ディエゴ・リベラ (Diego Rivera 1886-1957) は、メキシコのエクスポト (exvoto) を「メキシコ民衆の真実で現実的である唯一の絵画表現である」と賞賛し、それをメスティソ文化における人間精神の創造的表現であると述べている (Rivera 1925: 12)。エクスポトはラテン語で「誓願」を意味する神への奉納物であり、内臓のレプリカ、スズでできた四肢の型、金や蠟燭、外科手術器具、義足、個人の所有物 (服、メガネ、靴、杖など)、自己の身体の一部 (髪の毛など)、写真、手紙、絵画などすべての捧げ物のことをさす。メキシコにおいてエクスポトは、多くの場合奉納絵のことを意味し、それは、レタブロ (retablo) とも呼ばれ、災厄から神の慈悲と奇跡によって救われた後に、謝辞を書き込んで奉納するものだ。15×20センチメートル程の金属板が使用される場合が多く、病気、手術、交通事故、けんか、強盗、戦争、自然災害などに苦しむ様子、また跪き神に祈りと感謝を捧げる姿などが描かれている。上部にはその土地で信仰されているキリストや聖母、聖人たちの顕現が描写され、下方には事件の詳細とそこから救われた「奇跡」(milagro) に関する感謝の意が、署名や日付を伴って、民衆の話ことばで記述される<sup>1)</sup>。(以下、「エクスポト」はこの奉納絵のこ

とをさすものとする：文末図1)

エクスポトはスペイン人の入植とともにメキシコにもたらされた。18世紀以前のエクスポト奉納は主に上流階級の風習であり、厳粛で洗練された宗教画風のエクスポトが奉納されたが、19世紀以降のエクスポト、とくにメキシコのもは、一見稚拙な画風だが、独特の色彩感覚を持ち、その時代や地域の特徴が民衆の視点で描かれている点で大変興味深い。

作成されたエクスポトは、その地域の教会や寺院、巡礼先のキリスト、聖母、聖人の像周辺に掛けられる<sup>2)</sup>。メキシコにおいてエクスポトがもっとも頻繁に奉納された時期は19世紀後半から20世紀中盤、特に1880～1960の間とされている (Agraz y Beltrán 1996: 99)。この時代にエクスポトの奉納が最盛期を迎える背景には、いくつかの時代的要因が隠れている。レフォルマ戦争 (1857-1860) の結果、教会勢力が弱体化したことから、異端尋問の恐怖が軽減し、より自由に各地の神々への信仰を表現することができるようになったこと、ディアス大統領独裁政権 (1876-1911)、反政府革命 (1910-1917) とその後続いた政局の内乱といった動乱期の中で、多くの人々がさまざまな苦難や不幸を被ったこと、そして革命後の近代化の中で、交通事故や、都市やアメリカ合衆国などの移民先でのトラブルなどが絶えなかったことなどがあげられる。メキシコのエクスポトは、19世紀から20世紀にかけての政治変遷と民衆の日常世界との関連をわれわれに伝えると同時に、メスティソ文化が開花した後の民衆芸術としての価値を有している。さらに、人間と神のコミュニケーションの媒介物として、人々のシンクレティズムの信仰世界を垣間見ることや、その変遷を追う手がかりともなる。また、土地や国家との結びつきから生じるメキシコ人アイデンティティのあり方まで読み取ることが可能である。

アグラスとベルトランはエクスポトを「感情の伝達手段」とみなし、記載される聖人などへのメッセージ、絵画に見られる「奇跡」現場の風景や、人々の服装や持ち物などから、当時の人々の日常的な苦悩の体験や、「奇跡」の歴史性などを知る手段であるとしている (Agraz y Beltrán 1996:

102)。エクスポトには、絶対的な自然の脅威や歴史的不遇の中における人間の無能さと、そうした社会の中で作り出される痛みや死に対する人々の処世術が表わされている。

都市や外国に移民したものですら、故郷の聖人の顕現を思い描くエクスポトを人々の「心象スケッチ」と称したベラルドとヴェリエールは、地方と都市という異なる文化圏で奉納されるエクスポトを比較し、双方の社会変容過程を読み取っている (Bélaro y Verrier 1996)。

また、ドゥランドとマセイはアメリカ合衆国に移民したメキシコ人たちのエクスポトを中心に研究をし、移民たちがどのような出来事を人生の危機とみなし、それからどのような形で救われることを「奇跡」とみなすのかを、心理学的視点からも分析している (Durand y Massey 2001)。

本稿では、上記の諸研究の視点にもとづいて、とくにメキシコの女性によって奉納されたエクスポトを分析していく。スペインのエクスポトを考察したバラデス・シエラによると、誓約 (la promesa=Exvoto) とは、自己や親近者の身に起こる苦悩や切迫した死に対する恐怖によって動機づけられる (Valadés 1996: 219)。つまり、エクスポトは人々の人生観や死生観と深く結びついているといえる。前述したエクスポトの最盛期、つまりメキシコの社会が大変動を迎えていた時代には、近代化の中で女性の社会的立場も大きく変化した。そうした中で、女性が自らの身体に被る痛みや、近親者の不幸、それらを救い出す神の「奇跡」に対してどのような視点をもち、社会の変遷と共にその視点がどう変化してきたのかを考察していきたい。

## I エクスポトの作成背景

すでに述べたように、エクスポトはヨーロッパより伝わったキリスト教儀礼のひとつである。奉納絵としてのエクスポトは15世紀半ばにイタリアで始まったとされる。1660年のトレント公会議による教会の自己革新と教理確立に伴い、敬虔な信仰の報いとして奇跡的な癒しのおとずれを保障し

たため、エクスポトの奉納に拍車がかけられた。当初この習慣は、信仰の敬虔さを誇示する上流階級の間を広まった (Gifford 1992: 13)。

メキシコ人一般にエクスポトの奉納が浸透したのは、19世紀後半より、ミラグレロ (milagrero=奇跡画家)、またはレタブレロ (retablero=宗教画家) という民衆画家<sup>3)</sup>が安価な値段でエクスポト作成を請け負ったことに端を発する。上流階級を中心とした風習が、民衆のために絵を描く画家の出現によって、一般民衆に伝播したのである。さらに後世になると、一般の人々も絵心を習得し、自ら作成したエクスポトもみられるようになる。民衆の手によって描かれたエクスポトの絵は、人々のリアルな体験を彼らのオリジナルな手法で表わしているとも言える。19世紀後半以降のエクスポトは後年、プリミティズム、またはナイーブ・アートと称されるようになり、ディエゴ・リベラをはじめとするメキシコの芸術家や研究者の間で注目を集めることになる (Bartra 1995: 76)。

エクスポトに登場する主題は多様であるが、それらの中で共通したものが奉納者たちを生命の危機から救う「奇跡」である。メキシコ芸術批評家かつ人類学者であるアニタ・ブレナー (Anita Brenner 1905-1976) は、「奇跡」に関する言及は中世スペイン人と近代メキシコ人とが大きな相違なしに語り合える数少ない思想の一つであると見ている。しかし、一方で、当時のスペイン人にとって「奇跡」が、超自然的論理であったのに対し、メキシコ人にとっての「奇跡」とは、自然の概念から逸脱しないものであるとブレナーは考察している (Brenner 1925: 176)。

『奇跡論—ひとつの予備的研究』を著したC.S. ルイスは、奇跡とは人間の五感による体験であり、非常に曖昧で幻想的なものだとし、物象論が一般大衆の信仰体系になった西ヨーロッパでは、奇跡は存在しなくなったと推論している (ルイス 1996: 313)。メキシコの奇跡が「自然」として近年まで根深く民衆生活の中に生きてきたのは、アニミズムの要素のある土着宗教の影響もあるが、自然や歴史、そして人間の無力さによってもたらされるメキシコ民衆の不安を「奇跡」が癒してきたからだ。エクスポト

は、苦痛や不幸の中から想起する人々の想像力の作品である。より無力な民衆ほど、この想像力を駆使し、心の平安を求めた。1938年にメキシコを訪れたフランスのシュルレアリスト詩人アンドレ・ブルトンは「メキシコはシュルリアリズムの国だ」といい、メキシコの大地が奇跡や魔法にあふれていることに驚嘆している。ブルトンはオルメカ芸術、エクスポト、さまざまな仮面などに、メキシコ民衆の教養と夢見がちな性質を感じ取っている (Andrade 1998:60)。メキシコのエクスポトがヨーロッパのものよりも、色彩豊かでユーモアに富んでいるという複数の研究者の比較考察は、エクスポトという範疇に留まらず、メキシコの自然、歴史、文化などのあり方を顧みるきっかけともなる。

エクスポト奉納は、ヨーロッパでは19世紀末にほぼ見られなくなり、近現代の民衆文化としては根づかなかった (Durand 1995:13)。一方、メキシコでは19世紀後半から20世紀にかけて盛んになり、20世紀前半の社会動乱の中で「奇跡」の到来への懇願とエクスポトの奉納は、民衆の日常生活に浸透していった。しかし、エクスポトの奉納は今日のメキシコではあまり盛んではない。近年のエクスポトの奉納は、アメリカに移民したメキシコ人によるものが多い。ここには、メキシコ本土における信仰心の変化と、アメリカ合衆国のメキシコ人が経験する自己の無力さと日常的に被る苦悩といった背景がある。

## II エクスポトのジェンダー

19世紀末から20世紀中盤の間に奉納されたメキシコのエクスポトの多くは、男性奉納者によるものである。また、ミラグレラ (milagrera=女性の奉納画家) がいたという記録は残っていない。アグラスとベルトランの調査によると、19世紀にエクスポトを奉納した男女比は、男性58%女性18%で、20世紀になると、男性48%女性35%となる (Agraz y Beltrán 1996:122)。夫婦や家族単位で奉納されたものなど、はっきりと男女に分けることのできないものもあるが、数十年の間に女性による奉納率は約2倍に

なっている。また、ドゥラランドとマセイが調査したアメリカ合衆国のメキシコ人移民による奉納の場合は、その全体数において男性46%、女性41%とあまり差がない (Durand y Massey 2001 : 94)<sup>4)</sup>。アメリカ合衆国でのエクスポトは主に20世紀に入ってから奉納が多く、メキシコ本国における最盛期と少しずれがある。したがって、より近年になるほど女性の手によるエクスポトの奉納が増加する傾向にあるといえる。

メキシコのエクスポトに描かれる「奇跡」は、見えなくなった目が見えるようになる、病人がマリア像の涙によって癒される、といった劇的な奇跡物語ではない。事故から危機一髪で助かった、病が軽減した、逃げた家畜が見つかったなど、日常の中の不幸な事件とそこから救われる偶然の幸運を扱っている。これらの「奇跡」の起こる要因は男女に関係なくすべての人々が抱えており、平等に起こりうる。一方で、戦時期や社会動乱期などにおいては、戦場に出かける男性の方が生命を左右する「奇跡」により頻繁に遭遇するのも不思議ではない。しかし、絶対数は少ないものの、どのような時代においても女性は、女性の生活世界においてエクスポト奉納にふさわしい「奇跡」の体験を絶やしていない。

アリアスは、エクスポトは女性が悲しみや願望といった感情を表現できる特別許された文化空間であると述べている (Arias 2000 : 73)。カトリック教義の中で女性は、喜びの感情を規制され、痛みや苦しみを受難する存在として位置づけられてきた。そうした社会環境の中で、閉ざされてきた女性の声を公けの場にもたらしめているのが、エクスポトであるとアリアスは述べる。

エクスポトに表される「生命の危機」の場面は、さまざまな形の暴力によってもたらされる。アリアスらはそれらの暴力を、①個人的なもの、②社会的文脈から派生するもの、③国家の軍隊によるもの、の三つに分類した (Arias y Durand 1990 : 156)。この分類において、「個人的な」身にかかる暴力とは、病気、車や電車による事故、男性同士のけんかや殺し合いなどがあげられる (文末図2)。社会的というのは非常に範疇が広いが、

搾取される中での重労働、自然災害、集団強盗など特定の団体全体が被る痛みである（文末図3）。そして、軍隊によるものは、主に徴兵制度をはじめとし、政治的あるいは軍事的理由による投獄、銃殺、絞首刑などを指す（文末図4）。男性たちはこれらすべてのタイプの暴力を自らの身体で被ったが、女性たちは男性たちの苦しみのために苦しみ、祈りを捧げた。女性の祈りの特徴的な点は、家族や近親者（家畜等も含む）への配慮と言えるだろう。夫が投獄されては無事の帰還を祈り、息子が恋敵に刺されては復讐の成功を祈り、幼いわが子が死の床につくと小さな魂が安らかに昇天することを祈り、と女性たちの祈りは妻や母親としての務めの延長線上にある。男性たちのエクスポトは、自己の身におきた危険、事故や慢性的病、仕事の解雇、仕事上のストレス、アルコール依存症など、社会のあり方が自己の身体にもたらす問題に集中している。この男性の「生命の危機」も、当然歴史や社会の動きに翻弄されており、各時代の男性のエクスポトから読み取ることができる男性特有の痛みの変遷という重要な問題もあるが、本稿では詳しく取り上げない。ただ、ここでどうしても触れておきたいことは、社会動乱期にエクスポトの奉納は増加する傾向にあるが、1926～29年に起こった貧しい農民主体の反乱、クリステーロスの乱<sup>5)</sup>をテーマとしたものはほとんど見られなかったことである。アリアスとドゥランドは、その原因をエクスポト奉納の主役であった搾取され苦しむ労働者が、反乱の先導者となることで、行為の主体者となったからであると考察している（Arias y Durand 1990: 156）。エクスポトの背景にある祈りは、現実の不運に対してどうすることもできない無力な人間に唯一残された行為である。自らが主体的に反乱に参加し、社会の改革に実質的に参加しているときに必要であったのは、奇跡を求める祈りではなく、より積極的な行動であった。信仰というものが、自らの生命に対して力を持たないものたちの唯一の自己防衛手段であるとしたら、エクスポトの奉納という行為自体にもジェンダー性がみられるともいえるだろう。

女性の被った痛みには、近親者に対する懸念という心的不安の他に、出

産や病などの個人的なものをはじめ、女性であるがゆえに味わわなければならなかった社会的な痛みなどがある。それらが具体的にどのようにエクスポトに表されるのかを、次章で取り上げたい。

### Ⅲ メキシコ女性たちの奉納したエクスポト

メキシコ女性のエクスポトの主題は以下のように特徴づけられる。

- ①子供への心配（乳幼児の病気・死亡、成長した子供の結婚問題など）
- ②夫、息子の徴兵、旅、出稼ぎ、投獄などによる別離の不安
- ③政治的暴力への恐怖（特に1910年の革命以降）
- ④個人的なアクシデント（事故、病気、出産、家庭内暴力など）

日常生活の中で経験するこのような出来事に対して女性がどのような視点を持ち、どういった言葉で彼女たちの不安や痛みを表していたのかを、実際に奉納されたエクスポトより考察したい。ここでは、ハリスコ州北部のテマスティアン村のミラグレロであるヘロニモ・デ・レオン（Gerónimo de León）の作品を中心に考察する<sup>6)</sup>。

#### 1. 子供への心配

母親の子供に対する心配という主題は女性のエクスポトにたびたび登場する。とくに、死亡率の高かった時代の乳幼児の生死は母親にとってとりわけ重要な問題であった。子供の行方不明や病気、出産に伴う子供の命の危険などが取り上げられる。あるエクスポトには次のような記述が見られる。

1912年6月25日、私と夫がトタティチェに隣接したモチェ牧場に住んでいたときのことです。私は急に産気づきましたが、大変な難産になる予感がしました。その瞬間に私は心の底から稲妻のキリストに私の体の無事とこれから生まれてくる子どもが洗礼前に死なないことを懇願しました。キリスト様は私の願いを聞き入れてくださり、その永遠

なる慈悲をもって、私を祝福して下さい、私は幸福な気分になりました。私の子どもは生まれてきましたが、洗礼の水をかけるとすぐに死んでしまいました。私と夫のD.J.レジェス・サルダニャはこのレタプロをもって私たちのキリスト様に感謝します。永遠なる慈悲のために。1912年8月23日。

(ヘロニモ・デ・レオンの作品より：絵画部分は文末図5) (Brenner y Miguèlez eds.1996 : 113)

小さな子どもを失う母親には両義的な社会規範が付与され、その感情にも影響が与えられる。カトリック文化では、女性たちの規範は常に聖母マリアと比較して考えられていた。清廉潔白であるか、また子ども(イエス)のためにすべての痛みを背負うことができるかどうかという規範である。マリアの受難は「マリアの七つの痛み」<sup>7)</sup>と称され、メキシコの教会では短剣に胸を突かれて痛み苦しむマリア像を目にすることができる。この胸の短剣は「七つの痛み」の第一の痛みである。マリアが苦しむためにイエスを生むことは、すべての女性は痛みの受難を免れないことを暗示しており、この道德規範は今日でも農村部において根深く残っている。

そのような女性の痛みの基準を作り上げてきたカトリック文化は、女性に受難を強制するだけでなく、女性の痛みを緩和するという側面も持っている。その代表的なものが、「天使の通夜」(Velorio de Angelito)と呼ばれる幼い子供の葬儀に関する習慣である。幼い子供が洗礼後に死んだ場合、その子供は天の使いとみなされ、この世にメッセージをもたらした後は天に帰らなければならない存在とされる。つまり、その子は死んだのではなく、つかの間の使いでこの世にやってきただけなのである。天使が天に帰ることに悲しみは伴わない。母親はわが子の死を嘆き悲しむことは許されず、祝祭をもって天使を送り返さなければならないのである。子供が天使とみなされるのは、小さな子供がまだ原罪に身を染める以前の純潔さを保っているからであるが、天使となって天に帰るためにはカトリック教

徒でなくてはならない。したがって、幼児死亡率が高かった時代には、生まれた子どもはできるだけ早く洗礼を受け、カトリック教徒になる必要があった。異教徒として死ねば、地獄に落ちるからである。原罪を背負わない幼児は同時に清くして死んでいったイエス・キリストにも同化され、自動的に母親はマリアへと同化する。ここで、悲しみを感じてはならない「天使の通夜」で、母親は受難の運命を背負い痛みと向き合うマリアにも重ねられるという大きな矛盾に直面することになる (Aceves 1998:36-37)。このエクスポトには、まさに子供を失うことでさまざまな社会規範を背景にした母親の両義的な悲しみと喜びが表現されている。

メキシコで「天使の葬儀」が見られる地域は現在では多くない。この習慣に注目しているのは、アメリカ合衆国のカトリック団体である。子供の死を受け入れることのできない母親たちへのセラピーとしてその風習が用いられることがある<sup>8)</sup>。家族、とくにわが子をなくす女性の心理や立場、非常に内面的で個人的な喪失に対する悲しみまでもが文化規範の影響を受けているといえる。

## 2. 夫、息子の徴兵、旅、出稼ぎ、投獄などによる別離への不安

革命時代を中心とした社会動乱期のエクスポトを研究したアリアスとドゥランドは、革命時に奉納されたエクスポトを「生き抜いた者たちの物語」と呼んでいる (Arias y Durand 1990:156)。これら動乱期のエクスポトは、国家規模の政治的闘争の中で歴史の表舞台には出てこない地方の農村で横行した暴力 (強盗、強引な徴兵、死刑など) を浮き彫りにする。このような悲劇を生き抜いた男性たちによって奉納されるエクスポトには、自らの生命が救われたことに対する純粋な喜びと感謝の意が表わされる。社会動乱期のエクスポトでは「生き抜いたもの」、つまり身の危険を冒しながら戦場に出かけたり、旅をする男性が主役となる。男性によるエクスポト奉納が多いのはこうした背景がある。女性たちは、彼らが「銃弾を11発受けても死ななかった」などという奇跡に対して男性たちと同様に感謝

のエクスポトを奉納した。

### 3. 政治的暴力への恐怖

政治的暴力は、前述した徴兵や投獄といったものとも関係があるが、暴力に対する「恐怖」は、男女関係なく身体に襲い掛かるものである。世の中の不安定を嘆いた女性のエクスポトの記述がある。

私、ソル・ニコラサ・カスタニエダはここに証言します。1911年5月5日、三日熱に襲われました。それは革命によるススト (Susto) のために起こったのですが、私の苦しみは何の治療法もなく、大変長く続きました。しかし、稲妻のキリスト様が私の懇願をお聞きくださり、私は少しずつ回復し、とうとう完全に元気になったのです。苦しんだのは一年でした。(ヘロニモ・デ・レオン作品集より。下線部筆者)

(Brenner y Miguèlez eds.1996 : 32)

スストとは、スペイン語で恐怖やショックのことを指す。メキシコ人の伝統的な健康観に、スストによって何らかの病が引き起こされるという考えがある。通常、子供の病であるが、大人（とくに女性）にとっても主要な病因の一つである。スストによってもたらされる死は「悪い死」(la mala muerte) と考えられ、事故死や殺人などと同類とされる。反対に避けられない自然の病のため自宅で死ぬことを「良い死」(la buena muerte) と呼ぶ (Keaney 1969 : 444-446)。母親たちは家族がスストのために死なないようにと願うのと同様、自らがスストにかかることも恐れた。ヒュートンらはスストという現象とグリーフ・ワーク (悲嘆行為)<sup>9)</sup>との関係を次のように考察している。死とは喪失の一形態である。喪失が明らかで、それについてオープンに話せるときには悲嘆行為が生じるが、喪失がはっきりと認識されずに悲嘆できない場合、その代償行為としてスストにかかる。スストは儀礼によって取り除かれる。また、スストから癒され

るためには、自らが体験した恐怖や不安などを詳細に告白し、話してしまうことが必要である (Houghton and Boersma 1988 : 150-152)。

ここにあげた女性のエクスポトは、革命という政治動乱に対する恐怖からスストにかかったと述べているが、その背景には男性の不在、家族の死、自らの身にもおこりうる死というさまざまな不安要素がある。女性のエクスポトの特徴は、自らの不安を非常に詳細に自分の言葉で表すことにある。このことは、スストを癒すために必要な「すべてを話して楽になる」という治療効果にも類似しているようだ。エクスポトには奇跡を起こした神への感謝という目的以外に、自らの痛みを自由に告白することで、ある種の安らぎを手に入れるという機能もあるといえよう。

#### 4. 個人的なアクシデント (事故、病気、出産、家庭内暴力など)

女性がもっとも豊かなことばを用いて奉納したエクスポトは、彼女たちの身体におこる痛みについてであった。とくに身体のコンドーションに言及したものが多く、エクスポトに登場する病気は、当時病のひとつだと考えられていた出産をはじめとし、コレラ、しょう紅熱、ハンセン病、肺炎、天然痘、そして風邪や痛みなどあいまいな病状なども含め、時代や地域に応じて異なるさまざまな病状が表現されている。

女性による病状の説明は、多少大げさに繰り返し主張された。病気の発生から症状の悪化、彼女の生命を脅かすような苦痛、民間医師の治療、呪術師の祈祷を受け快方に向かったことなど、一連の病気のプロセスが詳しく表現されている。「ベッドから起き上がることができませんでした。脚のあちこちが腐って、水と血がたくさん出て、皮膚は穴だらけです」 (Arias 2000 : 71) のように、幾分ドラマチックに誇張されている。

19世紀の女性のエクスポトには、病名が出てくることは少なく、絵や言葉で病状の細密な説明がされている。「出産の病気」 (enfermedad de parto) をはじめとし、伝染病に関しては「差し込み」 (dolor de costado)、 「ひどい炎症」 (fuerte irritación)、 「恐ろしい傷」 (llagas terribles) や、

「たちの悪い痛み」(malgnos)、「しぶり腹」(pujo)、「ぎりぎりする腹痛」(torzón)、というように多少大げさな表現が用いられた。

病名が明記されるようになるのは、人々が病院で治療を受けるようになった近年のことである。記述内容は大手術の成功、肺炎や癌からの快復の様子へと変化し、「痛み」そのものは強調されなくなった。「良くない苦痛」(un mal padecer)、「秘密の病気」(enfermedad secreta)、「内側の病」(enfermedad interior) などという表現が好まれた婦人病に関しても「卵巣の腫瘍」などと、より医学的な表現が登場するようになった。

20世紀前半までのエクスポトには、農村女性たちの家畜に対する心配(盗難や病気など)が多く描かれている。エクスポトの背景には広大なメキシコの平原や山河が広がっており、当時の女性たちの生活空間を表わしている。20世紀中葉以降は、都市人口が増加し、それに伴って女性の生活様式は大きく変化した。女性は「家」というより小さな空間で暮らすようになり、関心や配慮の中心は災害や事故から「家」が救われることになってくる(Arias 2000: 72)。

この頃の女性特有のエクスポトのテーマとして「家庭内の暴力」がある。これは、女性の身に起こる深刻な事件のひとつであった。アリアスの研究では女性がエクスポトの中で家庭内暴力に言及するのは1930年代から1960年代までだと述べ(Arias 2000: 72)、また、バルトラは19世紀には家庭内暴力に関するエクスポトは存在しないと断言している(Bartra 1995: 87)。その理由を、夫よる妻への暴力はマチスモ社会の中であまりにも日常茶飯事であり問題視されなかった、夫による暴力を表現する方法を妻は持っていなかった、極めて「個人的」なことであり、また社会的タブーであったとバルトラは推測している。家庭内暴力に関するエクスポトには、夫による明白な殺人行為の描写と、一命を取り留めたことに対して神への謝辞が述べられ、他のエクスポトと同様に日付と奉納者の署名が記される。近年になりドメスティックバイオレンスを表わすエクスポトは再び消滅するが、それは“DV”に対する社会の認識の変化によるものと考えられている。ド

メスティックバイオレンスが法的に犯罪であるという認識が定着すると、女性たちはもはや自由にそのことについて話すのを止めてしまったのである。その傾向は、夫に法的制裁を与えることがより可能な都市部において顕著である (Arias 2000 : 72)。

1930年から1960年という時代は、メキシコの女性史においてその後まもなく展開することになるフェミニズム運動の準備期間とも言える。1975年にメキシコで開催された国連主催による第一回世界女性会議を境に、メキシコの女性運動は欧米のフェミニズム思想に同調し、女性の諸権利獲得を目指して展開していく。メキシコに根強く残るマチスモ文化の下で、男性の暴力に対する脅威からの解放という問題もメキシコフェミニズム運動の中で重要な位置をしめてきた。当時としては革新的な離婚法 (1915年) や家族関係法 (1917年)<sup>10</sup>が制定された後も、1960年代頃まで女性に対する社会通念は相変わらず「女は結婚し子どもを産み、夫と子どもの世話をするものであり、家事全般を担って夫に服従する」というものであった (国本 2000 : 252)。

女性たちが夫による暴力を、エクスポトを通して公けに証言し、神の力を借りて「奇跡」を起こさせたのは、まさにこのマチスモの現実と新法が保障した女性の権利との落差に対してどうすることもできなかった女性たちの自己救済ではなかつただろうか。

#### IV 痛みの表現手段としてのエクスポト

メキシコ近代芸術家たちの目にも留まったエクスポトは、プリミティブ・アート、ナイーブ・アートなどの新しい美術的価値を獲得するようになった。エクスポトが表現する、幸と不幸、自然と超自然、生と死などの二重性といった要素が芸術家たちの関心の対象となったのである。

近代メキシコ人の死生観の基盤を築いたとも言える版画家ホセ・グァダルーベ・ポサダ (José Guadalupe Posada 1852-1913)<sup>11</sup>は、日常におこる事件や悲劇を題材とする作品を多く残している。ポサダは、最終的に登場

人物の姿をことごとく骸骨姿で描くことで、悲劇も喜劇も同一視するメキシコ流の死を作り上げたが、ポサダの初期作品はエクスポトの特徴に酷似しており、また、時代も共通している。彼は、人間の不遇（災害、殺人、事故、畸形等）を徹底的に見つめ、絶対的な運命の暴力、その末に待っている死に対して、ユーモアという苦肉の手段をとった（Wollen 1989:15）。それは、悲劇を笑い飛ばすことで痛みを乗り越えようとする、無力な人々の生活の知恵とも言える。

エクスポトとポサダの作品に共通するのは、現実を変える力をもたないものたちの生きる手段を示しているということである。どうにもならない痛みと死への恐怖を自分の力で取り除くことができないのなら、「奇跡」を信じ、笑いと歓喜をもって、生を享受するほかないのだ。それは決して弱者の負け惜しみなどではなく、人生をより豊かにするためのエッセンスであり、痛みや死と共存していくための芸術活動なのである。

20世紀の代表的メキシコ女性画家フリーダ・カーロ（Frida Kahlo 1907-1954）も、エクスポトに大きく影響を受けた。メキシコシティのコヨアカン地区にあるフリーダ・カーロ博物館には、画家フリーダ・カーロと夫のディエゴ・リベラが収集したエクスポト約400点が壁一面に展示されている。夫リベラ同様、フリーダもエクスポトをメキシコ民衆のアイデンティティを表す代表的な民衆芸術と考えていた。「エクスポトは古代より伝承されたメソアメリカの奉納文化とヨーロッパの習慣に、民衆的な起源を合わせ持つ。それはポジティブで活力に満ちた混合で、純粋なメキシコ民衆のアイデンティティを時代と空間を越えて保有し続けるメスティソの芸術である」（Rivera 1979:57）というリベラの言葉には、革命後に生まれた土着文化に対する新たな視点がみられる。

フリーダは、アメリカの進歩主義や工業化に反発する作品も多く残したが、とりわけエクスポトに表わされる民衆の被る痛みの描写に惹きつけられ、自らの作品のいくつかも金属板の上にエクスポトの形式を真似て描いた。交通事故で生涯耐えがたい痛みと共存することを強いられたフリーダ

にとって、自由に痛みを表現できるエクスポトは、自らの痛みと向き合うためのひとつの手段であった。同時にフリーダは、エクスポトの粗野なバイタリティーの中に、生活の知恵であるアイロニーとユーモアを見出している。内面の苦痛と向き合いながら、それをまるで祝祭のような華やかな風采に包みこんでしまうこと、痛み苦しむ様子を奉納物として公けにすることで、痛みを対象化し、あえてその痛みを嘲笑して苦しみを和らげ、生きる力を養う効果をフリーダはエクスポトに発見した (Rico 1990:70)。それは、自らの姿を骸骨に見立てて笑うというメキシコの民衆の祝祭「死者の日」の自虐的ユーモアにもつながってくる。

神への奉納物でないフリーダの作品がエクスポトと比較されその類似性を指摘されるのは、双方の芸術が自分自身の体験をもとにした身体のものであるからだ。エクスポトで表現されるものは、身体と精神が味わう苦難と絶望の経験であり、それは生命の被る痛々しい事件を物語っている。また、エクスポトには奉納者の生活空間が風景として描かれており、土地とのつながりの中から生まれる生活苦と信仰心が垣間見えるが、フリーダの作品も、自己の身体の痛みをメキシコの歴史や風景に還元させて表現しているところがある。

フリーダ・カーロの作品が世界的に知られるようになった背景には、アメリカとドイツを舞台にしたフェミニズム運動が関係している (Bartra 1994)。夫婦間問題や中絶など、女性特有の痛みを扱う彼女の絵画は「苦しむ女性の象徴」としてフェミニストたちの間で人気を得たのである。フリーダが自らの身体が被る痛みを、スペインに侵略されたメキシコの痛み、欧米の先進国に翻弄されるメキシコの痛みとかけていることも、フェミニストたちの関心の対象となった。抑圧されてきた女性と弱者の痛みの声として、フリーダの作品が注目されたのである。自分自身の身体の痛みを、自分の感じたいように、見たいように、そして思いたいように自由なイメージと結びつけたフリーダの作品は、欧米の画家たちからはシュルレアリスムであると評価されたが、フリーダ自身は「私は夢の世界を描いたの

ではなく、自分にとっての現実を描いただけだ」と否定している（ジャミ 1991）。エクスポトに見られる「奇跡」も、彼らの信仰体系、または生活世界の外部にいるものの目には奉納者の自分勝手な解釈として映るかもしれない。しかし、奉納者にとっては、どの「奇跡」もまぎれもない現実世界の出来事である。フリーダ・カーロの作品とエクスポトの最大の共通点は、痛みをよりクリエイティブな視点で見つめ、それを通してより効果的に痛みとの共存を図ろうとする生への希求ではないだろうか。

エクスポトには、民衆の集合的体験に裏打ちされた個人的体験、つまり、社会や時代が作り出した個人の生死を左右する経験が描き出されている。エクスポトが「純粹絵画」とも呼ばれる理由は（Agraz y Beltrán 1996: 111）、民衆の感情があるのままに描かれているからだ。20世紀のメキシコルネサンスの中心となる画家たちが、エクスポトの影響を大きく受けたのも、権力者たちには届かない民衆の微細な声を聞き出すという彼らの芸術の目標をエクスポトの中に見出したからだろう。

## V 女性の痛みと死生観

エクスポトに表される女性の痛みは、身体的なものもあれば精神的なものもある。体の痛みと心の痛みというものは、しばしば切り離されて考えられがちであるが、女性奉納者たちにとって双方の痛みは神の慈悲と奇跡によって同様に癒されえるものである。また、自己の心身が被る痛みからの解放に対しても、近親者の被る痛みの快方に対しても、女性エクスポト奉納者は同様の歓喜を表わした。他者の痛みは、女性の心の痛みの多くを占めたが、その中でも、近親者の生命に関わる事柄が大半である。

西欧文化圏における「痛みの男性史」は、マチスモの影響を大きく受けている。恐怖心がしばしば臆病心と同一視されたため、痛みに対する恐怖心も多く言及を受けないまま近年に至った（Delumeau 2002）。最大の恐怖とも言える自己の死に対しても、毅然と立ち向かう態度が賞賛されたのである。カトリック文化のもとでは、女性はマリアの苦しみを模倣し、

常に夫や息子の死と向き合いその悲しみと嘆きの苦悩を背負わなければならないことは前述した。果敢に死に挑み、一命を取り留めたことに感謝を表わす男性のエクスポトは、数でこそ女性のエクスポトに勝るもの、痛みの表現の豊かさについては女性のエクスポトも劣ってはいない。出産などを通して経験する生死は、常に自己と子供（他者）との関係性の中より派生する。それには、男性のエクスポトが、殺される自分と殺す他者（自然災害や事故も含む）という対立関係を表わしているのに対し、女性のエクスポトは共に苦しみ共に救われるという、他者の生死との同化作用が働いている。

近年のフェミニズム運動は、女性の被る痛みの削減を大きな目標としてきた。メキシコ女性のエクスポトも、フェミニズム運動が進展するにしたがって、Ⅲ章で考察したようなエクスポトの女性的特徴が見られなくなる。しかし、これは一概に女性の痛みが緩和された結果とは言いがたい。女性の経験する痛みを、神と自己の自由なコミュニケーションではなく、自己と社会の問題へと変換されたため、その表現方法が限定されてしまったのではないだろうか。痛みを敬遠する近年の社会の中で、エクスポトに相当するようなリアルな痛みのマニフェストと、純粋な歓喜のことは存在するのだろうか。

メキシコにおけるフェミニズム運動の発展に拍車をかけたのが、1985年に首都メキシコシティを襲った大地震である。無差別に悲劇をもたらした大災害の被災者救済のために、あらゆる階層の女性たちが団結し、それまで溝のあった中間層のフェミニストたちと一般大衆の女性たちとの間が急接近し、相互理解が生まれた（国本 2000：251）。他者の痛みへの共感が、その痛みを取り除こうとする運動につながったのである。運命に対して主体的になった女性たちが求めたものは、痛みの告白のみに留まらず、それに対する具体的な対策であった。女性人権運動に使用される言葉は、男性や知識人にも通用する理論的なものである。エクスポトの中に見られるような自由で赤裸々な自己の苦悩や身体に関する表現は軽減してきた。法的

立場を獲得した女性は、女性特有のコスモロジーを構築する言語の使用から遠ざかってしまった。

### おわりに

本稿では、女性がエクスポトを通して表す心身の痛みと死生観についての考察を試みた。痛みに対する感情が、男性も女性も社会や宗教規範によって方向づけられることに触れたが、にもかかわらず女性たちがエクスポトに表した自己の痛みは、他者との関係の中で豊かに創造されたものであったことをここで改めて強調しておきたい。それは、神と自己との親密なコミュニケーションであり、また苦悩の様子を公けの場にさらすことによる社会への自己アピールであったとも言える。

エクスポトの中で女性たちは、家庭内暴力や性病など、当時の社会では公言できなかった主題について語り、家族や自分自身の身の安全を大変豊富なことばで祈願した。それらのことばは、彼女たちの信仰心と結びつき、聖人の顕現や、奇跡の訪れをもたらし心象世界を築き上げている。心象世界としての女性のエクスポトには、現実世界を投影させながらも、現実世界では口にすることのできない痛みや苦悩、そしてそこから救われるためのあらゆる希望が描き出されている。

エクスポトに描かれる情景は「痛み」の様子と、「感謝」の行為に大きく二分される。痛みの種類は大変豊富で、大災害から家畜の紛失まで、人間の体験し得るあらゆる「痛み」が表されるが、神への感謝の行為はすべて同じ謝辞の言葉“Doy gracias a……”（～に感謝します）をもって表わされる。すべての痛みが同じ比重をもって表されるエクスポトには、一種ポストモダン的な痛みのあり方が示されているようでもある。モリスはポストモダンの痛みを「それぞれが明確な固有の言葉や言説をもち、そのうちのどれかが絶対的に他に優越していない、多種多様な説明の体系あるいは下位体系」であるといい、それが実現するならば「混沌すなわち騒々しく張り合う話し声だけではなく、いくつもの声に耳を傾けて痛みに関する知

識を豊かにする方法が可能になる」と彼自身の願いを述べる（モリス 1999：489-490）。クリステーロスの乱で主体となった農民の痛みはエクスポトには告白されず、家庭内暴力が法で規制されるようになるとそれに関するエクスポトの数は激減する。エクスポトが表現してきたのは、運命を神の手のみ委ねたものたちの声であった。そういった意味でも、エクスポトはサバルタンたちの痛みを救い上げるものとしての機能を果たしてきたのではないだろうか。

近年ではアメリカ合衆国から奉納されるエクスポトが多い。その多くが、「市民」や「国民」という法的立場を伴わずに痛みを内に秘めた人々のマニフェストである。国境を渡る際に命を取り留めたこと、重労働の中での事故から助かったこと、苦難の中無事に帰国して家族と再会できたことなど、その主題はさまざまである（文末図6）。移民たちのエクスポトは、帰国の際に故郷の寺院に奉納されるか、移民先のカトリック寺院に奉納された。奉納絵としてではなく、彼らの体験の記憶として作成されたものもある。エクスポトは、アメリカ合衆国の権威には届かない移民たちの痛みを、自由に表現することのできる心象世界である。

メキシコにおけるエクスポトの奉納は近年あまりみられなくなった。これは都市化や近代化による信仰心の変化、都市社会の中で人々がより自発的に自己の行為や運命に責任を持つようになったことなどが考えられる。自己の生命に対して、より科学的で医学的な視線を持つようになったからかもしれない。エクスポトには、そうした近代化の過程が描かれる他に、その中で人々が感じてきた痛みの問題も浮上してくる。とくに、女性によって奉納されたエクスポトは公けの歴史の中には登場しない、力を持たず沈黙を守ってきた女性の心身が経験する悲喜の変化が詳細かつ豊かに描写された貴重な歴史資料である。

## &lt;図1～6&gt;



図1：メキシコシティ、グアダルベ大聖堂に奉納されているエクスポトの数々。現在では隣接する博物館の中にまとめられている。(2003年2月著者撮影)



*al beber tomado mi esposo Anastasio se cayó golpeándose la cabeza en una  
piedra al encontrarlo perdido de razón lo encomienda a Santa María de Atocha  
no se me fuera mover promitiéndole este retabito y aquí cumplió y el suero dejó de  
emborracharse Gracian de los María Antonia Yáñez de Guatimán México junio 1945.*

図2：酒に酔った夫が転んで岩にぶつけて怪我をしたが、命は無事だったことに感謝する妻の様子。酔っ払った男性が起こす事故（ケンカ、交通事故などは、エクスポトのテーマとして頻繁に登場する。図画の左上に描かれているのは、サント・ニニョ・デ・アトーチャ（アトーチャの幼子イエス）である。サカテカス州、1945年と記入されている。（著者所蔵）



図3：1985年にメキシコシティを襲った大地震の様子。グアダルーベの聖母に家族の無事を祈り、それが実現されたことに感謝するエクスポ。 (メキシコシティ、1985年の作品。2003年11月、メキシコシティのラグニージャ骨董品市場で売り出されていたものを著者が撮影)



図4：強盗犯の疑いをかけられ、銃殺刑にかけられそうになった自分の兄弟が、寛大な將軍によって釈放されたというグアダルーベの聖母の起こした奇跡に感謝する女性の奉納したエクスポ。メキシコシティ、1939年と記載されている。(著者所蔵)

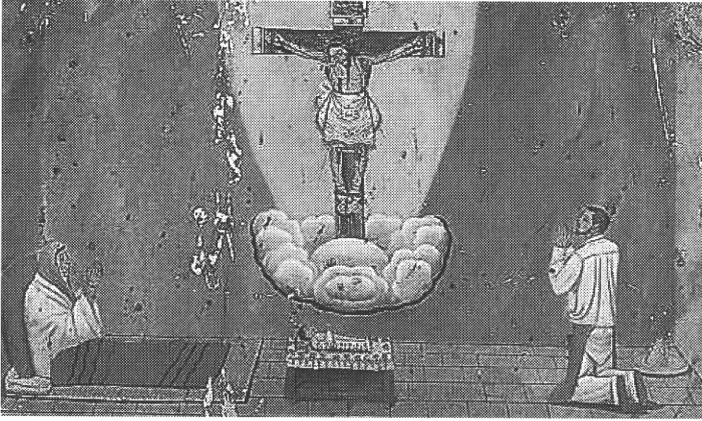


図5：ハリスコ州出身のミラグレロ、ヘロニモ・デ・レオンの作品集より。出産後間もなく死んでしまった子どもを花で囲んだ小さな台に乗せ「天使の葬儀」を行っている様子。(Brenner y Miguélez eds. 1996 : 113)



図6：アメリカ合衆国との国境であるリオ・ブラボ川を泳いで渡る移民の様子。メキシコの国家守護神、グアグルーベの聖母の庇護によって無事アメリカ側に渡れたことに感謝するエクスポト。(著者所蔵)

## 註

- 1) ロドリゲス・バセラはエキスボトを(1)物語的エキスボト(絵画や文章)、(2)象徴的エキスボト(その他のエキスボトすべて)と分類している(Rodríguez Bacerra 1989:123)。本稿で扱うのは前者の物語的エキスボトである。絵画の形でのエキスボトの登場の背景には、当時のヨーロッパに見られた三つの伝統的絵画の存在がある。(1)宗教画(キリストの生涯やそれに伴う奇跡の数々)、(2)奉納者の肖像(エリート階級は自分の肖像の脇に奇跡のイメージを描かせた)、(3)風景画(特に地中海地方の風景)(Durand 1995:3)。この三つの伝統絵画が物語的エキスボトの特徴の基盤を作っている。キリストなどの神聖なイメージと奇跡の描写、奉納者の個人情報、そして彼らの生活空間をしめす風景とのコンビネーションは、その他の形式での奉納物には見られない特徴(奇跡の視覚化と奉納者の人格明示)を備えている。
- 2) メキシコにおけるエキスボトの三大奉納地は、メキシコシティのグアダルーベの聖母(Virgen de Guadalupe)大寺院、サカテカス州のアトーチアの幼子イエス(El santo niño de Atocha)を祀る寺院、そして、ハリスコ州のサン・ファン・デ・ロス・ラゴスの聖母(La virgen de San Juan de los lagos)を祀る教会である。この他にも多数あるが、それらの多くが、ハリスコ州、サン・ルイス・ポトシ州、グアナファト州、そしてミチョアカン州に集まっている。これらの地域には、16世紀のころから鉱山労働や農業に従事するために、多くのスペイン人移民が入植した。それに伴い宣教師たちもこの地方のインディヘナたちを重点的に改宗し、結果として信仰心の強さという地域的特性を生み出すことになった。メスティソや先住民からなる自由労働者は過酷な労働条件のもと家族ぐるみで働いており、そうした厳しい生活を背景に多くのエキスボトが奉納された。
- 3) ミラグレロたちは多くの場合無名で仕事を受けたが、20世紀のミラグレロにはエキスボトに署名を残したものもいる。著名なミラグレロとしては、リンコン・デ・グアナファト村のエルメネヒルド・ブストス(Hermenegildo Bustos:1852-1906の間作成)、自ら出稼ぎを繰り返し各地で副業として5000点程のエキスボトを残したヴィセンテ・バラハス(Vicente Barajas:1942年より作成)、ハリスコ州北部の村のヘロニモ・デ・レオン(Gerónimo de León:1885-1915の間作成)などがある。エキスボト奉納最盛期にはミラグレロに作成してもらったエキスボトでないとご利益がないとされ、バルトラはそれを奉納画の市場経済化とみなしている(Bartra 1995:77-78)。1960年代以降、エキスボトの奉納が減少するにつれ、ミラグレロの数も激減した。今日奉納されるエキスボトはその絵柄から奉納者本人の手によって作成されるものと

考えられる。

- 4) ドゥランドとマセイの調査では、アメリカのメキシコ人移民によって奉納されたエクスポトは、1900～1939 (男性50%女性50%)、1940～1964 (男性48.5%女性51.5%)、1965～1979 (男性47.8%女性52.2%)、1980～1993 (男性66.3%女性33.3%) という統計が出ている。時代区分によっては女性の奉納数の方が上回っている (Durand y Massey 2001: 90)。
- 5) 国家と教会の対立。反教会条例を制定したカリエス政権に対して、カトリック教会とそれを支持する保守派が反乱を起こした。カトリックの熱心な信者をクリステロと呼び、その大半が貧しい農民で、武装蜂起に参加したのはほとんどそうした貧農であった。反乱の舞台となった地域は、エクスポトの奉納が盛んな地域と重なっている。
- 6) 現存するヘロニモ・デ・レオンの作品は100作程あり、すべて1885年から1915年という革命前後の社会動乱期に作成されたものである。レオンのエクスポトはテマスティアン村の守護神「稲妻のキリスト」(Señor de los Rayos) に奉納されている。レオンは村の貧しい人々に依頼を受け、彼らの生活に密着したエクスポトを多数作成した。
- 7) 「マリアの七つの痛み」とは、(1) シメオンの予言 (この先の運命のお告げ)、(2) エジプトへの逃避行、(3) 少年イエスと神殿ではぐれる、(4) イエスの十字架への道行き、(5) イエスの十字架上での死刑、(6) 死んだイエスを十字架からおろす、(7) イエスの埋葬、の七つである。
- 8) インターネット上のカトリック団体のホームページ「La Cruz de California」では、カリフォルニア在住メキシコ人のためのカトリック会報誌を毎月掲示している。2000年11月の記事で「天使の葬儀」を取り上げ、「死んだ子どもが天使 (Angelito) であったと考えることでわが子の死から立ち直ることができた」という母親の体験を掲載している。アメリカでのカトリック布教とメキシコ系移民を中心としたカトリック信仰を見直す運動ともつながっている。http://www.lacruzdec.com/articles/2000/1100 et 2.htm (2002年11月27日アクセス)
- 9) Grief Work (スペイン語では Duelo) とは、死生学の分野で頻繁に使用される用語である。あらゆる喪失に対する心理過程のことをさし、主に自己や他者の死に直面するときに起こる悲嘆行為のことをさす。
- 10) 離婚法、家族関係法はメキシコ革命に参加した女性たちが女性の権利を要求した結果、男女平等を目指して施行された。伝統的なカトリック社会では離婚が禁じられており、メキシコでも1866の民法で妻は法的に夫に服従するものだとされていた (国本 2002: 312)。
- 11) ホセ・グアダルーベ・ボサダは圧制者を批判する風刺画を描くことで民衆

の人気を集めた。ポサダは登場人物をすべて骸骨姿で描き、現実社会の無常観や人間の生死の表裏一体性を強調したことから、メキシコの国民的年中行事「死者の日」(Día de Muertos)にはポサダの風刺画が欠かせなくなった。今日にいたるまで、ポサダのユーモアあふれる骸骨画は「死と戯れ、死を恐れない」というメキシコ人の死生観の概観を表している。

## 文献リスト

- 国本伊代.2000.「メキシコの新しい社会と女性」(国本伊代編、『ラテンアメリカ 新しい社会と女性』新評論)、242-262ページ。
- .2002.『メキシコの歴史』新評論。
- ジャミ, ローダ.1991.『フリーダ・カーロ』水野綾子訳、河出書房新社。
- モリス, デイヴィド B.1999.『痛みの文化史』渡邊勉・鈴木牧彦訳、紀伊国屋書店。
- ルイス, C.S.1996.「奇跡について」(山本和美編、『C.S. ルイス著作集2 奇跡論—一つの予備的研究』、すぐ書房)、313-334ページ。
- Acevez, Guitierre.1998. “Rituales de la vida en la Muerte : Imágenes de la inocencia eterna”, *Artes de México*, (15), pp.27-49.
- Agraz, Elin Luque., y Michele Beltlán. 1996. “Regalo para el Arte : Los Exvotos Mexicanos de los Siglos XIX y XX”, *Dones y promesas 500 años de arte ofrenda* (México : Centro cultural Arte contemporáneo Fundación Televisa), pp.99-243.
- Andrade, Lourdes.1998. “Breton en México. Humor negro y pasión”, *Artes de México*, (43), 1998, pp.59-61.
- Arias, Patricia.2000. “Palabras, Imágenes y Silencios : El Exvoto Femenino”, *Artes de México*, (53), pp.64-73.
- Arias, Patricia., y Jorge Durand.1990 “La visión de los salvados : Los retablos de la revolución y la guerra cristera”, *Historias* (México : Instituto Nacional de Antropología e Historia), pp.155-160.
- Bartra, Eli. 1994. *Frida Kahlo : Mujer, Ideología, Arte* (Barcelona : ICARIA).
- . 1995. “Fe y Género : La imaginaria popular en los Exvotos pintados”, en Carmen Nova (coord.) *México en el imaginario* (México : Universidad Autónoma de México), pp.73-90.
- Bélar, Marianne., y Philippe Verrier.1996. *Los Exvotos del occidente de México* (Michoacán : El colegio de Michoacán).
- Brenner, Anita.1925. *Idols Behind Alters* (New York : Payson and Clarke).
- Brenner, Olaf., y Victor Manuel Miguélez (eds.). 1996. *Jerónimo de León : Pintor*

- de milagros* (México : Roche).
- Delumeau, Jean.1989.*El Miedo en Occidente* (Madrid : TAURUS).
- Durand, Jorge.1995.*Los Exvotos : Vida y milagros de los Mexicanos* (México : Leonor Villasuso de la Meza).
- Durand, Jorge., y Douglas S. Massey.2001. *Milagros en la frontera* (México : CIESAS).
- Giffords, Gloria K.1974. *Mexican Folk Retablos : Masterpieces on Tin* (Tuscon : The university of Arizona Press)
- Houghton, Azula A., and Frederic J.Boersma.1988. "The Loss-Grief Connection in Susto", *Ethnology : an international Journal of cultural and social anthropology*, 28(2),pp.145-154.
- Keaney, Michael.1969. "Los conceptos de Aire y Susto : Representaciones simbólicas del ambiente social y geográfico percibido", *América Indígena*, 29(2),pp.431-450.
- Rico, Araceli.1990. *Frida Kahlo : Fantasía de un cuerpo herido* (México : Plaza y Valdes).
- Rivera, Diego.1925."Los retablos : verdadera,actual y única expresión pictórica del pueblo mexicano", *Mexican Folkways*, octubre-noviembre, (3), p.12.
- .1979.*Arte y Política* (México : Editorial Grijalbo).
- Rodríguez Bacerra, Salvador.1981. "Exvotos pictóricos de Andalucía y América : Planteamientos metodológicos para un análisis comparativo", *Primeras Jornadas de Andalucía y América Tomo II* (Madrid : Instituto de Estudios onubense), pp.269-270.
- .1989. "Formas de la religiosidad popular. El Exvoto : Su valor histórico y Etnográfico", en Salvador Rodríguez Bacerra (coords.) *La religiosidad popular I. Antropología e Historia* (Barcelona : Fundación Machado), pp.123.
- Valadés Sierra, Juan Manuel.1996. "Una aproximación a los Exvotos españoles del museo nacional de antropología", *Anales del Museo Nacional de Antropología*,(111), (Madrid : Dirección general de Bellas Artes), pp.211-233.
- Wollen, Peter.1989. "Introducción", in Julian Rothenstein (ed.), *Posada : messenger of mortality* (London : Redstone Press), pp.14-15.